

# JARMeC NEWS

2025  
Autumn

ジャーメック ニュース 2025 秋号

Vol.  
20



## INDEX (目次)

P.2 日本動物高度医療センター（ジャーメック）  
JARMeCについて

P.3-7 症例紹介

- 01 循環器科 ペースメーカー植え込み術により心不全を離脱した第3度房室ブロックの犬の1例
- 02 消化器科 膽囊胞の診断と治療
- 03 整形科 運動器超音波検査で診断した浅指屈筋腱脱臼の犬の1例
- 04 血液内科 犬の前駆細胞標的免疫介在性貧血（PIMA）の1例
- 05 麻酔科 副腎腫瘍（褐色細胞）摘出術の麻酔管理

P.8 病院紹介 川崎本院 | 東京病院 | 名古屋病院 | 大阪病院

P.9-10 JARMeC グループからのお知らせ

動物検診センター キャミック | ペット用酸素ハウス テルコム

# ご挨拶

「365日、かかりつけ医のすぐそばにいる高度医療チーム」として

拝啓 向寒の候、貴院におかれましては益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

日頃より、日本動物高度医療センター（JARMeC）の活動に温かいご理解とご支援を賜り、心より御礼申し上げます。

私たち JARMeC は、「どうぶつを愛する家族の希望となる」ことを使命に掲げ、365日、かかりつけ医の先生方のすぐそばで、高度医療を提供するチームとして歩んでまいりました。二次診療専門の病院として、紹介症例に真摯に向き合い、最先端の医療機器と専門診療科を備え、より確かな診断と治療を目指しています。

また、臨床研究・人材育成・高度医療の実践という創設の際に掲げた3つの柱を大切にしながら、動物医療全体の発展に少しでも貢献できるよう、日々努力を重ねております。

本誌『JARMeC NEWS』では、当センターでの症例紹介や研究活動、グループ会社の取り組みなどをご紹介させていただいております。ご覧いただき、皆様との連携をより深めるきっかけとなれば幸いです。私たちは、現場で日々奮闘されている先生方の存在を何よりも尊重し、共に支え合える関係を築いていきたいと願っております。

今後とも、JARMeC をどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

敬具

株式会社日本動物高度医療センター  
代表取締役社長 平尾 秀博



# 日本動物高度医療センター（ジャーメック） JARMeCについて

私たち日本動物高度医療センター（JARMeC）は、かかりつけ病院さまからご紹介を受けて高度医療を行う二次診療病院です。

“かかりつけ医のみなさまのすぐそばにいる高度医療チーム”として、365日、1年を通して休診日を作らず、常に患者さまの受け入れを行っています。医療技術や知識の向上に努めるだけでなく、動物とともに生きるすべての人々の気持ちに寄り添い、「紹介してよかった」「受診してよかった」と思える動物医療の提供をすべての専門スタッフが連携し、一丸となって行っております。

## 365日かかりつけ医のすぐそばにいる高度医療チーム JARMeCの3つの特徴

### 01 国内トップの診療実績

- ・年間1万件超の症例に対応する4つの専門病院
- ・高度医療機器と専門診療科による高精度な治療
- ・臨床研究にも取り組み、常に医療レベルを向上

### 02 先生方を支える、 安心の連携体制

- ・365日診療対応で緊急症例にも迅速に対応
- ・完全紹介制でかかりつけ医との連携を重視
- ・全国4700以上の動物病院と連携ネットワークを構築

### 03 チーム医療による包括的ケア

- ・専門医が連携し、チームで診療を実施
- ・かかりつけ医と協力し、安心の医療を提供
- ・飼い主様に寄り添う丁寧な説明と対応

## 数字で見るJARMeC

この1年間も多くの症例に向き合ってまいりました。  
これからもどうぶつを愛する家族のためにかかりつけ医の皆様との連携をしてまいります。

直近1年・二次診療の初診数  
(JARMeC、25年3月期)

10,031頭

直近1年・二次診療の総診療数  
(JARMeC、25年3月期)

34,991件

直近1年・二次診療の手術数  
(JARMeC、25年3月期)

3,068件

直近1年・画像診断数  
(キャミック含む、25年3月期)

10,686件

酸素ハウス新規ご利用件数  
(テルコム、25年3月期)

24,250件

獣医師数  
(キャミック含む、25年3月期)

122名

連携病院数  
(25年3月期)

4,647施設

一次診療施設様との連携病院比率  
(25年3月期)

日本の全動物病院の 36.2 %

01

# ペースメーカー植込み術により 心不全を離脱した

## 第3度房室ブロックの犬の1例

疾患動物  
情報

動物種 犬 品種 トイプードル  
年齢 8歳2か月齢 性別 去勢オス 体重 4.7kg

主訴  
病歴

心拡大

### 第3度房室ブロック

第3度房室ブロックは房室間の完全な伝導遮断が認められる不整脈です。高度の徐脈を呈することから、徐脈性心拡大それに続発するうつ血性心不全を発症することがあります。

### 検査所見

X線検査では、重度の心拡大が認められ、両側後葉領域に肺水腫が認められました。心エコー図検査では、重度の左心拡大が認められました。全ての弁において逆流血流が認められ、特に僧帽弁は顕著な弁輪拡張により弁尖逸脱が重度でした。心電図検査では、第3度房室ブロックが認められ、心室補充調律は46 bpmと低下していました。

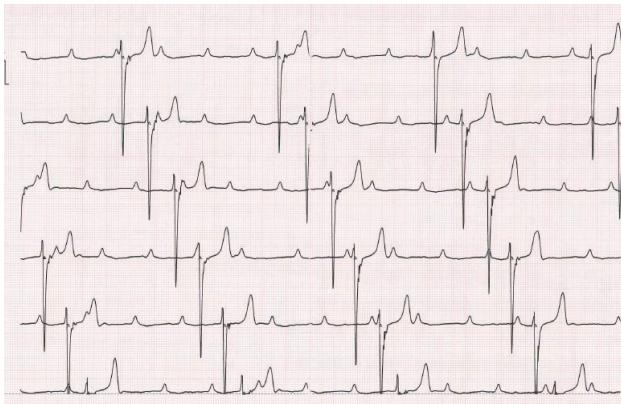


図1 初診時心電図検査

### 診断

第3度房室ブロック、徐脈性心拡大に伴ううつ血性心不全。

### 治療方針

入院下にて、ドブタミンおよびイソプレナリンの持続点滴、フロセミドの投与により肺水腫の改善を試みました。治療により肺水腫は改善しましたが、高用量のフロセミド(5 mg/kg/day以上)でないと、呼吸状態の維持が困難でした。このため、内科治療による長期的なコントロールは困難と判断し、第4病日に心外膜ペースメーカー植込み術を実施しました。

### 経過

術後3日前後で肺水腫は速やかに消失し、第10病日に退院しました。左房サイズは正常範囲まで縮小し、現在もピモベンダンとフロセミド(2 mg/kg/day)にて肺水腫の再燃は認められておらず、経過は良好です。

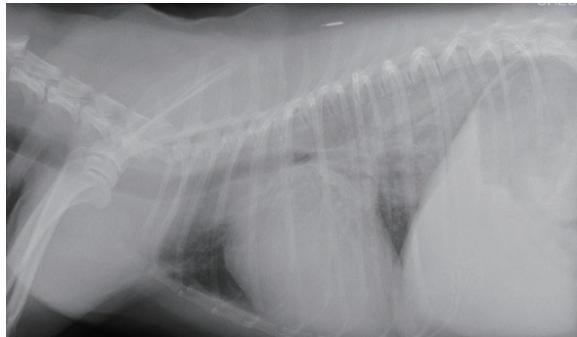


図2 初診時胸部X線検査

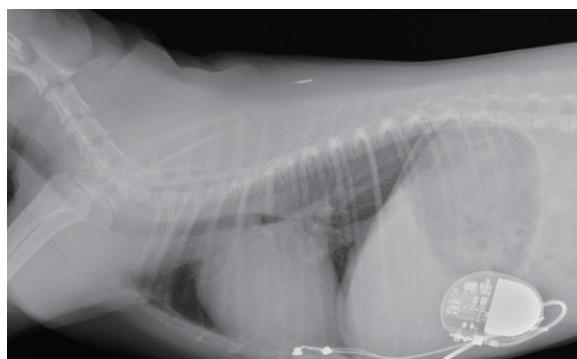


図3 第7病日胸部X線検査

### 考察

第3度房室ブロックでは、運動不耐性や失神といった臨床症状を呈することが多いものの、徐脈性心拡大に伴ううつ血性心不全を発症することがあります。本症例においても、心拡大に伴う顕著な僧帽弁弁輪の拡張により僧帽弁逆流が重度となり肺水腫に至ったと考えされました。ペースメーカー植込み術の実施により、心不全から離脱することができ、今後の臨床症状の予防が可能となりました。

## 本稿の執筆者

循環器科・呼吸器科

今田 舞  
こんた まい

日本獣医生命科大学獣医学部獣医学科卒業。都内病院勤務を経て、2021年日本動物高度医療センターに入社。

## 02

## 膵嚢胞の診断と治療

## はじめに

膵嚢胞は膵内あるいは膵周囲に形成される中空の構造で、内部に膵液、粘液、血液などを容れたものと定義されています。嚢胞壁内腔面に上皮細胞を認めないものを仮性嚢胞とし、真性嚢胞と区別します。仮性嚢胞は一般的に、膵炎や外傷により膵管が破綻し、膵液や壞死物質が貯留して形成されます。中高齢の犬や猫で報告されていますが極めて稀で、その診断ならびに治療については不明な点も少なくありません。今回6症例の経験から得られた診断・治療についての知見を紹介します。

## 症例および症状

症例は犬3例(7-10歳齢)ならびに猫3例(8-17歳齢)で、元気食欲低下を主症状に腹部痛(2例)、嘔吐(4例)や体重減少(2例)がみられ、約2週間の対症療法の後に当センターを受診されました。

## 検査所見

腹部超音波検査で膵臓領域(左葉:犬2例、猫1例、体部～右葉:猫2例、全域:犬1例)に接した嚢胞構造(30-61mm)を認めました。いずれも膵臓や嚢胞周囲腹膜のエコーレベルの上昇を伴うことから膵炎の関与が疑われ、膵炎による嚢胞形成、仮性嚢胞が疑われました。



図1 超音波像：膵臓領域の嚢胞状構造物

## 臨床経過

初診時に症状の軽減がみられた犬の1例では膵炎に対する対症療法を継続とし、4日後には元気食欲の改善と嚢胞の縮小がみられました。一方で症状が持続していた症例は、嚢胞内容の精査と合わせた嚢胞への治療介入として嚢胞穿刺を行いました。嚢胞穿刺を行った症例のうち、猫の2例では穿刺後すみやかに元気食欲の改善が得られ、経過を追えた1例では穿刺後8カ月後には嚢胞の縮小が認められました。穿刺後も嚢胞内容液の再貯留がみられ、症状が持続した犬1例と猫の1例と重度腹部炎を認めた犬の1例ではCT検査後(図2)に外科治療(経消化管的内瘻ドレナージ)にすすみました。術式としては嚢胞と接する消化管に切開を加え、さらに嚢胞による膨隆部に対して消化管内腔より切開を加え、嚢胞につながる瘻孔を形成しました(図3)。切除した嚢胞の病理組織学的検査では、いずれも仮性嚢胞と診断が得られました。全症例で術後嚢胞の退縮とともに、症状の改善が得られました。

ドレナージ)にすすみました。術式としては嚢胞と接する消化管に切開を加え、さらに嚢胞による膨隆部に対して消化管内腔より切開を加え、嚢胞につながる瘻孔を形成しました(図3)。切除した嚢胞の病理組織学的検査では、いずれも仮性嚢胞と診断が得られました。全症例で術後嚢胞の退縮とともに、症状の改善が得られました。

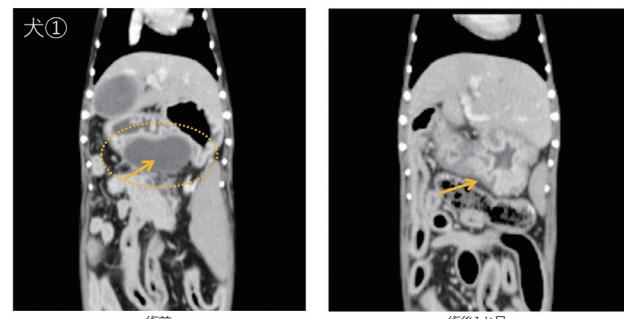


図2 術前・術後のCT像

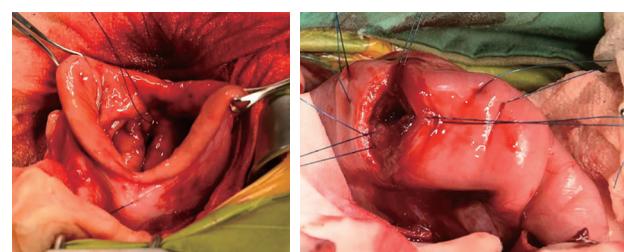


図3 手術写真 (左:膵嚢胞胃開窓術、右:膵嚢胞十二指腸開窓術)

## まとめ

膵嚢胞の確定診断としては病理組織検査が必要となります。今回膵嚢胞を認めた犬猫の症例は、いずれも経過および嚢胞内容液の性状検査や超音波検査所見から膵炎に伴う仮性嚢胞と考えられました。内科治療に反応し、症状の改善を示す場合には嚢胞穿刺や外科的介入の必要はなく、改善が認められない場合には嚢胞の縮小および嚢胞性状を評価とした嚢胞穿刺を行うこととしています。さらに嚢胞穿刺後も臨床症状の改善が見られない例では外科治療を考慮すべきであり、特に経消化管的内瘻ドレナージは臨床症状の改善が得られるとともに、明らかな合併症もみられないことから、仮性嚢胞に対する有効な治療手技と考えられました。

## 本稿の執筆者

泌尿生殖器科・消化器科 医長 北里大学獣医学部獣医学科卒。

**中島 麻里**

なかじま まり

2012年に日本動物高度医療センターに入社。

## 03

運動器超音波検査で診断した  
浅指屈筋腱脱臼の犬の1例疾患動物  
情報

動物種 犬 品種 雜種

年齢 3歳齢 性別 避妊メス 体重 16.4kg

主訴  
病歴

運動後から右後肢の非負重性跛行

## はじめに

浅指屈筋腱とは、腓腹筋腱とともにアキレス腱(総踵骨腱)を構成する腱のひとつで、大腿骨尾側から浅指屈筋として始まり、途中から腱となって踵骨隆起上を通り、足底部から分枝してそれの中節骨で終始します。浅指屈筋腱は踵骨に固定されておらず内外側の支帯によって付着しているため、外力が加わると支帯の損傷が生じ浅指屈筋腱の脱臼が生じますが、特に内側支帯は弱く、外方への脱臼が生じやすいと言われています。発症原因としては、活動性の高い犬でのジャンプの着地失敗などの外傷が多いですが、遺伝的素因や踵骨隆起の低形成などの形態異常の関与も報告されています。

## 診断

本症例は、右踵骨隆起周囲の腫脹が観察され、触診すると弾力性に富んだしこりが外側へ外れる様子が観察されました。その際に疼痛は見られませんでした。また単純X線画像では、踵骨隆起周囲の軟部組織のX線不透過性の亢進および腫大が観察されました。運動器超音波検査では、アキレス腱短軸断像にて浅指屈筋腱の外側への変位が観察され、浅指屈筋腱腹側に位置する腓腹筋腱と複合腱に異常は認められませんでした。以上の検査結果より、浅指屈筋腱の外方脱臼と診断しました。



図1 単純X線画像(側面像)  
踵骨隆起周囲の軟部組織にX線不透過性亢進および腫大が認められた。

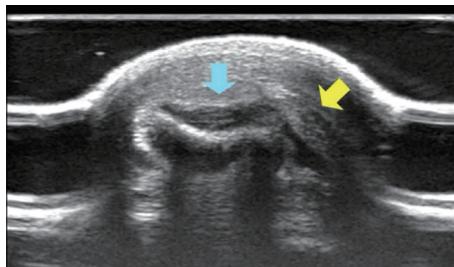


図2 運動器超音波検査画像(アキレス腱短軸断像)  
本来、浅指屈筋腱(黄矢印)は腓腹筋腱と複合腱(青矢印)の背側に位置するが、この図では浅指屈筋腱は横(外側)へ変位している。

## 治療

脱臼の頻度が高く跛行もみられたことから外科治療が適応と判断しました。浅指屈筋腱の内側支帯の裂開を確認後、非吸収性縫合糸にて浅指屈筋腱辺縁と内側支帯の縫合を実施しました。術後はスプリント材を使用した外固定および運動制限を4週間継続し、さらに外固定解除後も運動制限を3週間継続しました。運動制限解除後、浅指屈筋腱の再脱臼はみられず歩様も正常となりました。

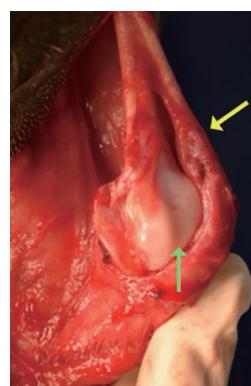


図3 術中画像(内側観)  
踵骨隆起(緑矢印)から浅指屈筋腱(黄矢印)が外側へ変位している状態を示す。

## 終わりに

浅指屈筋腱脱臼は触診や単純X線検査により診断は可能ですが、運動器超音波検査では単純X線画像で写しだされない浅指屈筋腱を視覚的に把握することが可能となり、また貯留液の有無やその程度、周囲の軟部組織の状態も確認できることから、より詳細な診断が可能となります。また整形疾患では、詳細な情報獲得のためにCT検査を実施することができますが、運動器超音波検査は無麻酔で画像検査が可能となるため、症例への負担軽減につながり非常に有用な診断ツールのひとつです。大阪病院では、整形疾患や末梢神経障害を疑う脳神経疾患などで積極的に運動器超音波検査を実施しておりますので、ご希望の際はお問い合わせください。

## 本稿の執筆者

脳神経科・整形科 医長

鬼頭 梨永

きとうりえ

北里大学獣医学部獣医学科卒業。  
2010年日本動物高度医療センターに入社。

# 04 犬の前駆細胞標的免疫介在性貧血(PIMA)の1例

疾患動物  
情報

動物種 犬 品種 ボストン・テリア  
年齢 9歳4ヶ月齢 性別 去勢オス 体重 9.0kg

主訴  
病歴

貧血に伴う活動性の低下

## PIMA (Precursor-targeted immune-mediated anemia)について

無効造血によって生じる持続性の非再生性貧血であり、骨髄中の各分化段階の赤芽球系細胞が標的となって免疫学的に破壊されて貧血が起きる疾患です。過去には非再生性免疫介在性貧血(NRIMA)と呼ばれていましたが、新しい疾患概念として2017年にミシガン州立大学のLucidiらによって病理学的所見とともに提唱されました。診断には①5日以上持続する非再生性貧血、②標的赤芽球より未熟な細胞の増加および成熟停止による無効造血、③異形成所見の欠如、④マクロファージによる赤芽球貪食の4条件を必要としています。

## 検査所見

初診時のPCVは23%、網状赤血球数は39,100/ $\mu\text{L}$ と再生所見に乏しい貧血が認められました。末梢血液塗抹所見では橢円赤血球症(図1)が認められ、骨髄塗抹所見では明らかな異形成所見はなく、好塩基性赤芽

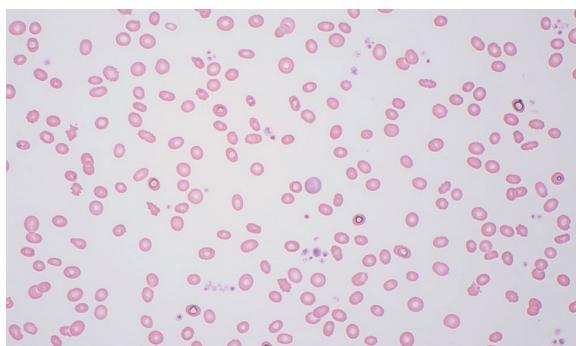


図1 末梢血液：橢円赤血球症 ライト・ギムザ染色×400

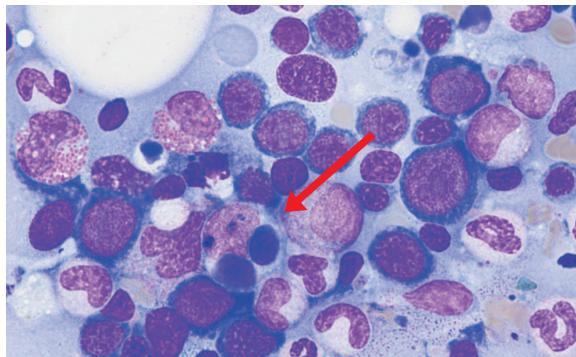


図2 骨髄：未熟な赤芽球系細胞の増加と赤芽球貪食(矢印) ライト・ギムザ染色×1000

球の増加および正染性赤芽球の減少および赤芽球貪食(図2)が確認されました。

## 治療と経過

初診時に実施した血液検査、骨髄検査の結果にもとづき、まずプレドニゾロン(1.1 mg/kg SID)を処方しました。第14病日に経過観察を行ったところ、血液検査でPCV 29%、網状赤血球数 169,600/ $\mu\text{L}$ と血液学的に改善が認められました。また、この時点でPIMAの診断が確定されましたので、免疫抑制量のプレドニゾロン(2.0 mg/kg SID)を処方しました。第30病日からは免疫抑制剤のミコフェノール酸モフェチル(10 mg/kg BID)の併用を開始したところ、第47病日にはPCVが39%まで上昇しました。その後プレドニゾロンを1.1 mg/kg SIDまで減量したところ、第121病日にPCV 31%に低下したためミコフェノール酸モフェチルを15 mg/kg BIDまで增量しました。同時にプレドニゾロンの長期使用に伴う皮膚石灰症を発症したことから、シャンプー療法を継続したところ徐々に皮膚症状は改善しました。第245病日以降はかかりつけ医で治療を継続しています。

## まとめ

PIMAの治療成績は、免疫抑制療法を実施したAssenmacher(ミシガン州立大学)による66症例の回顧的研究では奏効率83%、生存期間中央値913日と報告されています。しかし当センターにおける20症例を用いた検討では奏効率72%、生存期間中央値139日であり、先の報告との違いが認められました。米国では中型～大型犬種が主体であり、日本では小型犬種が多いことから症例群の違いによる影響が示唆されました。当センター血液内科では治療成績の向上を図るべくさらなる検討を継続しておりますので、PIMAが疑われる症例が来院されたらご紹介頂ければ幸いです。

## 本稿の執筆者

## 腫瘍科

**中道 潤**  
なかみち じゅん

山口大学農学部獣医学科卒業。東京大学動物医療センター内科研究 生を経て、2012年日本動物高度医療センターに入社。

## 併診

## 血液内科 科長

**辻本 元**  
つじもと はじめ

東京大学大学院農学系研究科博士課程修了。東京大学動物医療センター・センター長を経て、2021年 日本動物高度医療センターに入社。

# 05 副腎腫瘍（褐色細胞腫） 摘出術の麻酔管理

疾患動物  
情報動物種 犬 品種 ミックス(柴×パグ)  
年齢 12歳6ヶ月齢 性別 去勢オス 体重 17.6kg主訴  
病歴

食欲不振

## はじめに

褐色細胞腫(Pheochromocytoma)は、副腎髓質のクロム親和性細胞に由来する腫瘍であり、カテコールアミンの過剰分泌や腫瘍の浸潤によって循環へ大きな影響を与えます。しかしながら特異的症状ではなく、詳細な画像検査により偶発的に検出される incidentaloma として発見されることが多いです。褐色細胞腫が疑われた場合、アドレナリン(エピネフリン)の代謝産物であるメタネフリンの尿中濃度が診断材料となることもあります。本腫瘍は増大し破裂に至ることもあるなど、手術適応であれば外科的切除により長期予後も期待されます。手術では大きな血圧変化を呈することが多く、これに対応するための麻酔計画が必要となります。

## 症例概要

3カ月前からの食欲不振の原因が特定困難とのことで当センターを受診。CT検査で片側の副腎腫大が認められ、尿中ノルメタネフリン濃度は高値(NMN/Cre 300nmol/mmol)であり、褐色細胞腫が強く疑われた。輸血準備を整えたうえで摘出手術実施。術中に急速で大きな血圧変化が起きたが、過剰に上昇する前に降圧剤投与により血圧調整した。腫瘍切除以降の状態は安定しており、出血量は少なく輸血を行わずに手術は終了した。術後経過は良好であり、手術実施から5日後に退院。病理組織診断は褐色細胞腫であった。

## 術中麻酔管理

麻酔導入、気管挿管、体位変換などでバイタルサインに明らかな変化は見られなかった。局所麻酔として傍脊椎ブロックを行っており、皮切や開腹のバイタルサインも著変は見られなかった。

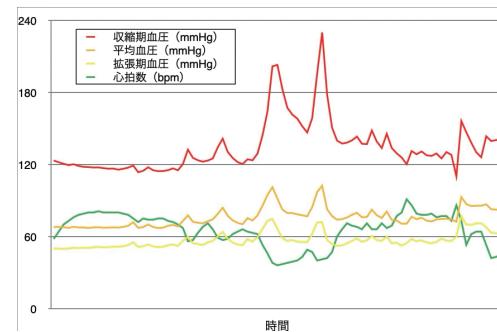
副腎周囲での手術操作、血管処理などで大きな血圧上昇[操作前 121/53 (71) mmHg → 操作後 198/71 (103) mmHg]と心拍数減少[操作前 65 bpm → 操作後 40 bpm]が認められた。バイタルサインに注意しながらフェントラミン 15 µg/kg を静脈内投与したところ、血圧および心拍数は改善した。[血圧:143/52 (74) mmHg、心拍数: 50 bpm]

状態が安定したのち手術操作を再開すると、再び顕著な血圧上昇 [232/77 (106) mmHg] と心拍数減少[40 bpm]が認められた。より大きな変動であったため、今度はフェントラミン 20 µg/kg を静脈内投与したところ、血圧・心拍数ともに改善した。[血圧:136/52 (74)、心拍数: 70 bpm]

その後はバイタルサインに大きな変動はなく、後大静脈に浸潤していた腫瘍栓の切除も行われたが出血は少量であり、腫瘍切除以降もバイタルサ

インに問題は見られなかった。

麻酔導入薬はプロポフォール、麻酔維持薬はセボフルランを使用し、周術期鎮痛薬はフェンタニル・ケタミン・メトミジンをCRIで使用、局所麻酔薬はブピバカインを使用した。



(図) 腫瘍操作時の血圧および心拍数の変動(一部抜粋)

## おわりに

褐色細胞腫から過剰に産生されるカテコールアミンによる過度な血圧上昇は、血管障害(特に脳、心臓)を引き起こす可能性があり、収縮期血圧が180～250mmHgに入った段階で降圧剤投与による血圧調整が必要となります。カテコールアミンによる状態変化の種類や程度は、一般状態・基礎疾患などによって異なります。血圧上昇がより強い症例では、本症例と比較し、降圧剤をより高用量で投与し、かつ持続点滴を行う必要のあるケースもあります。過度な血圧上昇を抑えられた一方で、降圧剤による血管拡張の結果、静脈灌流量の減少からボリュームのコントロールを求められるケースもあります。また、カテコールアミンによる頻脈があれば、β-アドレナリン受容体遮断薬の投与が必要となることもありますが、投与タイミングによっては高血圧を助長するため適切な判断が求められます。腫瘍切除後にアドレナリン受容体のダウンレギュレーションと各遮断薬の効果による急激な血圧低下を起こした場合には、その他の昇圧剤投与が必要となるケースもあります。褐色細胞腫の可能性がある副腎摘出術においては、様々な血行動態の変動が起こりうることを想定し準備しておくことが肝要です。

### 本稿の執筆者

麻酔科・集中治療科

中畠 公志

なかはた こうじ

麻布大学獣医学部獣医学科卒。  
2008年に日本動物高度医療センターに入社。  
動物麻酔基礎技能認定医。

JARMeCは全国4つの病院に、12の診療科を備えています。疾患動物たちの様々な症状に対して、新たな技術や医療機器を取り入れ治療を行っています。

12の専門診療科



循環器科



呼吸器科



脳神経科



整形科



腫瘍科



泌尿生殖器科



消化器科



血液内科



麻酔科



集中治療科



放射線科



画像診断科

## 川崎本院



2007年開業。JARMeCグループ最初の動物病院であり、民間でははじめて「小動物臨床研修診療施設」として農林水産大臣の指定を受けた動物病院です。

TEL 044-850-1280

FAX 044-850-8123

〒213-0032

神奈川県川崎市高津区久地2-5-8

## 名古屋病院

2011年開業。東海エリアを中心 「地域に根差した二次診療」を目指し、高度な動物医療をかかりつけ医のみなさまとともに構築することに注力しています。

TEL 052-933-9901

FAX 052-800-1213

〒468-0003

愛知県名古屋市天白区鴻の巣1-602



## 東京病院



2018年開業。川崎本院とともに、首都圏の東部・北部エリアを中心に高度な動物医療をかかりつけ医のみなさまとともに構築することに注力しています。

TEL 03-5851-0300

FAX 03-5686-3500

〒121-0075

東京都足立区一ツ家3-1-7

## 大阪病院

2023年開業、2024年には放射線棟が完成しました。関西エリアを中心にかかりつけ医のみなさまとともに、高度な動物医療の提供に取り組んでいます。

TEL 072-730-0070

FAX 072-730-0071

〒562-0036

大阪府箕面市船場西3-14-7



## 予約方法

### 診療受付

### 電話受付時間

9:00 ~ 18:00

今日・明日・あさっての診療をご希望の方

お電話にてご連絡ください

今日・明日・あさっての診療のご相談は、お電話でお問い合わせください。  
症例の容態などをお伺いし、ご案内可能な日時を回答いたします。

外来・入院・退院・面会を含め、すべて完全予約制です。最終予約の方の診療および会計を終えしだい、受付窓口は終了します。

それ以外の診療をご希望の方

ウェブサイトまたはFAXにてご連絡ください

24時間受け付けております。お申し込み後、当日～翌日を日安に、お電話にて内容確認と予約日についてこちらからご連絡いたします。



# 創業20周年—JARMeCグループと共に、動物医療の未来を切り拓く

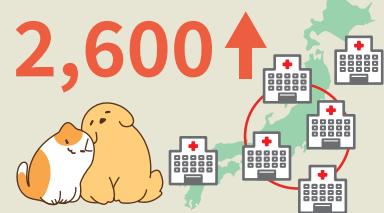
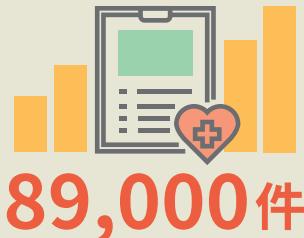
2025年7月、動物検診センター キヤミックはおかげさまで創業20周年を迎えることができました。この節目を迎えたのも、日頃ご利用いただいている動物病院の皆さま、関係者の皆さまのご支援の賜物と、心より感謝申し上げます。

JARMeCグループの一員となってから11年。グループの一員として活動する中で得た経験を活かし、より質の高いサービスの提供に努めてまいりました。

これまでに累計89,000件を超えるMRI/CT検査・画像診断を実施し、関東を中心に約2,600以上の動物病院にご利用いただいております。

この実績は、皆さまからの信頼と、私たちの技術力の積み重ねの証であると考えております。

今後もグループ全体でのシナジーを最大化し、獣医療の進化に貢献し続けてまいります。これからも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。



## 創業20周年 特別企画 実施中!

創業20周年を記念して、特設ウェブサイトを開設いたしました。

これまでの歩みや、動物医療への思い、そして未来への展望を、さまざまな角度からお届けする限定コンテンツをご用意しています。

### 1 20周年特別コラム

キヤミックの歩みと未来を語る、[特別連載コラムを配信中](https://camic.jp/column/)



### 2 20周年記念セミナー(オンデマンド配信)

業界注目の講師陣による全3回のオンラインセミナーを配信

3回シリーズ／2025年9月～順次公開

第1回：「進行性脊髄軟化症への対応」

松永悟先生(株式会社キヤミック 代表取締役/日本動物高度医療センター 脳神経科・整形科 科長)

第2回：「ここ5年で気になる病気」

戸島篤史先生(日本小動物医療センター 画像診断科 科長)

第3回：「最近話題の神経疾患」

長谷川大輔先生(日本獣医生命科学大学 獣医放射線学研究室 教授)

セミナー詳細・お申し込み  
<https://camic.jp/seminar/>



すべての20周年コンテンツは、こちらからアクセス!  
キヤミックWEBサイト <https://camic.jp/>



動物検診センター キヤミックは、動物病院からの紹介によるMRI・CT検査に特化した画像診断専門施設です。

- ◆ キヤミック城北 埼玉県さいたま市南区鹿手袋2-11-5 TEL: 048-606-3732
- ◆ キヤミックひがし東京 東京都江戸川区東葛西5-32-5 TEL: 03-6808-2139
- ◆ キヤミック城南 東京都世田谷区深沢8-19-12 TEL: 03-5752-5033



IoT  
モニタリング  
機能搭載



静音

軽量

低消費  
電力

ペットの在宅ケアに

## ペット用 酸素ハウス<sup>®</sup>

### 「ペット用 酸素ハウス<sup>®</sup>」とは？

お部屋の空気から、高濃度の酸素をつくり出す酸素濃縮器と酸素を溜めるケージを組み合わせてペットの酸素吸入を助けます。

#### テルコム社製「ペット用 酸素ハウス<sup>®</sup>」3つの特徴

**酸素濃縮器** 空気から酸素以外の成分を取り除くことで、高濃度酸素を生成しています。ポンベと違い、酸素がなくなることはありません。

**専用ケージ** 流量が多いので、ケージの中に酸素を供給しながらペットが吐き出した二酸化炭素をケージの中から押し出し、換気できるように作られています。

**操作方法** テルコムの酸素ハウスは、器械とケージをホースでつないでスイッチを入れるだけで簡単に利用開始できます。

#### NEW 新型 酸素濃縮器

- 軽量化 約16kgまで軽量化（従来品は23kg）
- 静肃性 45dB以下まで下がりました。
- 消費電力 従来品より31%削減



#### Pick up

新型器には「IoTモニタリング機能」を搭載。  
遠隔操作により弊社側で酸素濃度をモニタリングし、器械の状態を把握できます。器械の性能低下を把握できるので、適切なタイミングで器械交換が可能となります。

### レンタルプラン・料金

※価格はすべて消費税込み価格です。

#### 基本料

レンタル日数に関係なく、お渡し時に  
お支払いただく料金です。



酸素濃縮器(新型器)  
8,800円



酸素濃縮器(従来器)  
5,500円

#### プラン別レンタル料

プラン・利用日数により異なります。月ごとにお支払  
いいただく費用です。

・小型ケージプラン  
(5kg程度のペット向け)

月額 18,150円 ひと月のレンタル日数  
が15日未満の場合 1日 1,210円

・中型ケージプラン  
(10kg程度のペット向け)

月額 28,050円 ひと月のレンタル日数  
が15日未満の場合 1日 1,870円

・ケージ無しプラン  
(ケージに入れない大型犬向け)

月額 18,150円 ひと月のレンタル日数  
が15日未満の場合 1日 1,210円



#### オプション料・配送料・回収料

その他ご希望により、オプション品（酸素濃度計）・オプションサービス（設置）・配送料・  
回収料金がかかります。詳しくはHPをご覧ください。

### 飼い主様用レンタルカタログ

飼い主様へご紹介いただく際に使いやすく為のカタログをご用意しております。  
ご希望の先生は下記のアドレスまでご連絡ください。



テルコム株式会社

〒223-0058

神奈川県横浜市港北区新吉田東 8-27-20



酸素ハウス terucom<sup>®</sup>  
[www.terucom.co.jp](http://www.terucom.co.jp)

[info@terucom.co.jp](mailto:info@terucom.co.jp)

## ご案内

## 連携動物病院制度

当センターは疾患動物に一貫性のある動物医療を提供するために、  
地域の動物病院と相互に医療連携・コミュニケーションを図ることを目的として  
「連携動物病院制度」を取り入れています。

連携いただいた先生方には、下記のサービスを提供させていただきます。

- ✓ 当センターのウェブサイト「連携動物病院検索」に病院情報を掲載
- ✓ 当センターから「連携病院の証明書」を発行
- ✓ 当センターから「学術情報・セミナー情報等」を配信
- ✓ 紹介いただいた症例について、当センターにおける「診療・手術」の見学受け入れ  
※事前に飼い主さまからの同意をいただくようお願いいたします。

※これらの提供サービスには、一切費用・義務は発生しません。

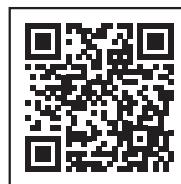
## 連携お申し込み方法

## 電話またはメールにてご連絡

日本動物高度医療センター  
管理部 連携病院担当

メール [partner@jarmec.jp](mailto:partner@jarmec.jp)  
電話 044-850-1320

## 専用フォームよりお申込み



フォームにて必要項目の入力を  
お願いいたします。  
申し込み完了後、当グループより、  
申し込み完了のご連絡と当グループ  
のパンフレットをお送りいたします。

## 【JARMeC NEWS の配信について】

配信の開始・送付先変更・停止をご希望の方はお手数をおかけいたしますが、お電話またはフォームよりご連絡をお願いいたします。

## フォーム

必要項目を入力の上お申し込みください。



お電話でもお問合せできます。

「ジャーメックニュースについて」とご連絡ください。

上記 QR コードから  
パンフレットの  
発注もできます

